

三保サト子

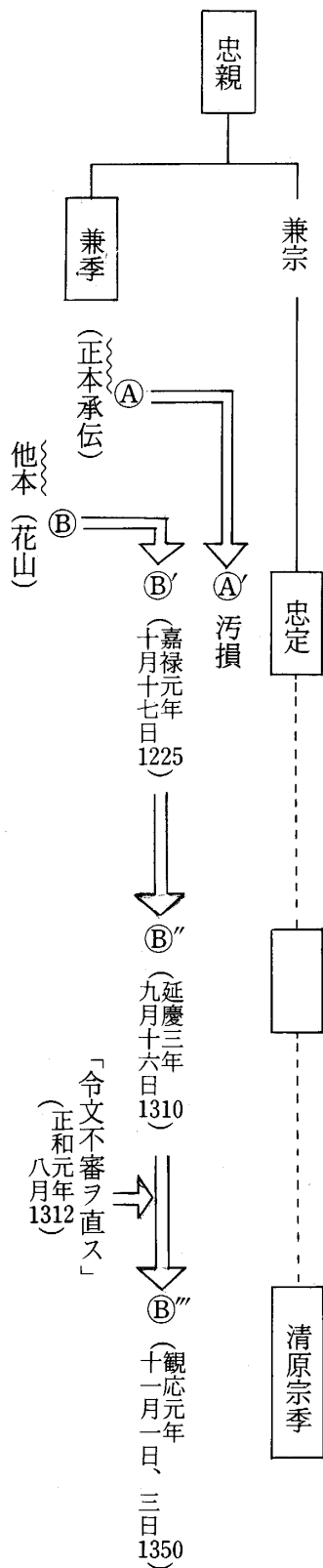
Satoko MIHO

『貴嶺問答』は、中山内大臣藤原忠親（一二三二—一九四）の撰述と伝えられる消息文例集である。その写本としては、現今、十九点が知られている（旧版『国書総目録』による）。この大部分は近世以降の書写にかかるものであるが、神宮文庫に所蔵される中山孝親書写本は、書写年代が最も古く、室町時代末のものと推定されている。

孝親（五二一・五七八）は、忠親の十三代目の孫に当る。この孝親本と群書類従所収本¹、それに『日本教科書大系』所収の謙堂文庫本²、内閣文庫蔵の一本などに同じ奥書があり、それらによれば、次のような伝来経路をたどることができる。

清原宗季（二三三—一三八三）は良兼の息。主計頭、博士、大外記等を歴任し、従四位上に至る。代々、助教、直講、大外記等を勤める家であり、曾祖父良枝は七代侍読（龜山、後宇多、後二条、後伏見、花園、後醍醐、光厳）、祖父宗尚は四代侍読と記されている。本書の書写者としては、多分に相応しい人物と言えよう。奥書に見える観応元年には二十八歳ということになる。孝親本には、右奥書とは別に、さらに中山孝親写の奥書が付加されている。

その、中世における書写本、書写の記録はこのように少ない。あるいは、広く流布する情況がなかったのではあるまいか。実用に供することを目的にして編述されたものであり、その利用者は、法制、有職故実に通じていることを要求された職務にある官人に限られたことが推測される。



撰述者を中山忠親とすることは、奥書にも記される通りであり、ほぼ疑いがない。ただし、どの範囲まで忠親の手が入っているかという点については、ほとんど言及されることがなく、問題を残している。

成立時期は鎌倉時代初頭（文治年間）と言われ、その証として、これまでに、⑦北陸武士の京都乱入（後掲、第Ⅰ部⑩状）と、④大仏完成と陳和卿の帰国（続稿、第Ⅱ部⑦状）とが取りあげられている。この他にも、内印盗難など所収状に合致する記録を見出したものがある。また、検非違使仲頼、磯禅師など、他の文献に登場する人名も散見する。詳細は別稿に譲るものとするが、こうした点については、本書の所収状全体を見渡す視点から、一層の補強をはかる必要がある。

書状内容の解釈については、『教科書大系』所収本の「目次」に、「主要内容」がまとめてあつて便利である。しかし、極めて簡略なものであり、十分とは言えない。返状は令条の引用が中心であることもあつて、比較的単純な文章から成るが、その内容には疑問点も多い。正確な注釈作業が望まれるところである。

以上のような研究の現状を踏まえて、本稿では、『貴嶺問答』の全体像をとらえるために、構成を明確にすることを主要目的とした。構成が明らかになり、部分の特色を知ることができれば、おのずから、そこに働いた撰述者の意図も浮かび上つてくると考える。ただし、紙数の制約のため、本稿では前半部だけを直接の考察対象とし、後半部については続稿とした。

全体の構成と各部の特色

はじめに全体像を結論風に提示し、順次、各部の特色を述べることとしよう。

構成につき、筆者は次のように整理したい。

- (1) 序（冒頭に位置する二通一組）
- (2) 第Ⅰ部（前半部の四十通二十組）
- (3) 第Ⅱ部（後半部の八十四通四十二組）
- (4) 結び（末尾に位置する二通一組）

従来は、(1)の部分が序に当るらしいことの指摘がなされたのみで、(2)(3)

(4)の区切りは見過ごされてきた。すなわち、全体を雑然とした集合体とみなしてきただけで、そのため、その編述意図といったことも把握できなかったのである。

(1) 序について

冒頭に置かれた二通は、本書の総序に相当する。往状は「令」の概略を注釈して欲しい」との依頼状であり、返状は、これに答えて、「令義解」十巻の目次を注進したものである。

次に往状の全文を掲げる。本書の引用は類従本によるものとする。付訓も同様である。

何事候乎。或人、云、令十巻、尤可ニ習学ニ書也、者、件、書雖レ聞ニ其名ニ未レ見ニ其体ニ。事、趣粗欲ニ注給ニ。耳。謹解。

閏十月三日

「或人」の個人的見解だとしても、この時代においては、『令』は「尤も習学すべき書なり」と言われている点に注目すべきである。つまり、ここに、編述者の基本的立場が表明されていると考えるからである。

結語は「謹解」である。『公式令』によると、「謹解」は、八省以下内外諸司が太政官に上申する公文書の様式に使われる。本状は恐らく、実際に上申されたのではなく、公用文書の体裁を取って書かれたものである。うが、かかる公文書として仕立てたところに、編述者の意図が窺われる。すなわち、「令の重視」は、単に私的レベルの問題ではない、広く一般政治社会の規範であるべきであり、官に携る者の基本的心得として受取らせたい、ということである。往状は、発信者（差出人）、受信者（名宛人）を特定せず、太政官管轄下にある八省以下内外所司の全官吏の声を代弁した書状として位置付けられたのである。

返状はかなり長い。「尋ね仰せらるる所の令は、天下の大小事を定め置く書なり」と述べたのち、「令」の制定、施行の経緯、続いて、『令義解』十巻の撰述、施行について記し、「件の十巻の目録、之を注進す」として、『令義解』十巻の目次を掲げている。

右返状の本文は、大部分が抜き書き引用によって成っている。例えば、『令義解』の撰述について記した部分、「同（天長）十年、右大臣夏野等上表

曰、(中略)「星霜五變繕写功遂」は、夏野の上表文からそのまま抜いたものである。目次も、『令義解』の序文に示されているものを抜き書きしたと見られる。恐らく、『令義解』を傍らに置いて、正確、忠実なることに留意しつつ認められたであろうことが見て取れる。必要最少限のことしか書かない。文頭に置いた短い慣用的挨拶表現の他には、修辭的な配慮もほとんどなさそうである。

こうした特色は、追って検討する第I部所収状においても、同様に指摘できるところである。消息文例集とはいいながら、本書の範文意識は、所謂、修辭的な方面へは働いていないようである。この事は、本書の書状内容が、大部分公務に関わる用件で占められていることと密接に関係しているよう。そうした公務の場合においては、まず、迅速、確実であることが優先されるからである。

さて、この返状は、往状の申し出に答えて『令』の大略を解説し、「大概、貴命に依りて言上すること件の如し」と結んでいる。従って、ここで往状の用件は一応処理されたことになる。ところが実際には、第三状以下において、日常的、具体的問題が個別に提示され、それらが、『令』の条文、及び、その解釈を示した『令義解』によって解決されていく。すなわち、第三状以下もまた、『令』について理解を深めさせる働きをする。そういう位置付けがなされているのである。

返状が、制定過程と総目次によって『令』の全体像を把握させることを意図したと見られるのに対して、第三状以下は、その内容を、より詳しく具体的に知り、現実生活への適用例を見ることがよって、『令』のもつ現実的、実用的価値を認識させようとしたと考えられる。冒頭の二通は、編述者の明確な意図によって、総序としてここに据えられたのである。

ところで、この一組は「閏十月三日」(返状は「後十月三日」)の日付をもつ。この日付については、石川氏に次のような言及がある。

この往来を書きはじめた年を指したものとすると、この前後に閏十月のあったのは、寿永二年(1183)だけである。もしこれを生かして考えるとすれば、寿永二年のころから筆をおこして、大動乱の京都市内で、世上と身辺との静かな折折をぬって文を進め、文治年中に完結したものと想像せられぬでもない。

石川氏は、「もしこれを生かして考えるとすれば」、「想像せられぬでもない。」といった表現で慎重に提示された。また、橘豊氏は、本書の成立時期を推定する手掛りに、冒頭書状の日付(石川氏の見解)を採りあげていない⁷⁾。しかし、この二通の書状が担う重要性からして、「閏十月三日」を無意味なものと考えすることはできないのである。本書では、後述の第I部所収状には全て日付があるが、それらは特定の行事に結び付いた根拠のあるものである。意味のない日付けを形式上だけ書いておく、といったことはしていない。(3)の第II部では日付が全く記されないのも、こうした編述態度の表われと見られる。従って、「閏十月三日」は、本書の編述に関わる特別の日であったか、あるいは、実際にこの序を据えた日であると考えられるべきであろう。ただし、本書が、現存するような形で冒頭から順に書き継がれたとは考えにくい。

因みに、『山槐記』には、寿永二年閏十月の記事が現存しない⁸⁾。

この前後、京都では争乱の渦中であって騒然としていた。七月二十五日、平宗盛以下一門は安徳天皇を奉じて西海へ赴き、後白河法皇は延暦寺に脱出した。二十八日には源義仲が入京、八月六日に平家一門の解官がなされる。二十日、法皇の擁立する高倉第四皇子(後鳥羽天皇)の践祚があり、九月になって、法皇から平氏追討を命じられて西下した義仲が、水島の戦いに敗れて帰京してきた。この後、十一月十九日の義仲による法皇御所法住寺殿焼打ちという武力クーデターまでの不穏な情勢の中において、この『貴嶺問答』は編集された、あるいは、編集に着手されたということになる。これを、寿永二年正月、権大納言に任じられたばかりの忠親に即して考えてみれば、後鳥羽親政のスタートとの関わりが想定される。新帝は幼なくて、自らの意志で政治革新を計ることはないにしても、平家のいなくなった朝廷に、それなりの建て直しの気運が起きたとしても不思議ではない。

余りに瑣末な事柄にとらわれているかに見える『貴嶺問答』の話題も、当時の貴族政治にとっては重大事であったのかも知れない。これが、彼らの手に残された政治であったとすれば、全ての規範を律令に求めようとする「建国の精神」が、そこにこめられていたと考えることができるのである。

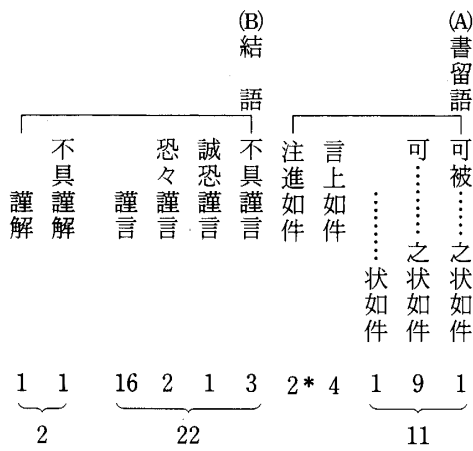
(2) 第Ⅰ部について

第Ⅰ部は、十二月往来型の消息文例集である。冒頭の二通（序相当）を除いて、第三状から第四十二状までの四十通がこれである。所属状に①④⑩の通し番号を付し、概要一覧を作成して本稿末に掲げた（別表Ⅰ）。第Ⅰ部の顕著な特徴は、全書状に日付があることである。排列は、この月日の順になっている。

ただし、月によって書状数の片寄りが大きい。この点が、『雲州（明衡）往来』などとは違っている。往返一組と数えたと、一月に五組、二、四、九、十一月に各二組、他は一組となっている。欠ける月はない。月日の表わし方は単純であって、異名などを使うことはない。

差出人（発信者）は初めの方（①④⑩）にだけ記されている。名宛人（受信者）は往状の①③⑤⑦⑨⑪⑬の七通に記されている。返状には書かれていない。記名は原則として官職のみである。全て中央官吏であって、地方官はいない。書状内容と官との関係は明らかでないものが多い。一部に記された理由も、途中で記されなくなる理由も分らない。

文末慣用表現（書留語、結語）の使用状況は次のようである。



*この内の一例は、「誠恐謹言」と併用されている。

「……之状如件」「謹言」が大部分を占め、多様性に欠ける。ここでも、種々の表現を提示して読者の利用に供するという意図がなかったことが窺える。

本書の場合、書留語と結語とは併用されず、どちらか一方で済ませるのが原則である。両方を使った唯一の例外は、⑫状である。

上所の使用は一例（①左大将→謹上権大納言）のみであり、脇付はない。こうした慣用表現の在り方を、百年後に成立した『弘安礼節』におけるそれと比較してみると、いかにも単純で大まかである。書留語、結語、上所、脇付、署名等の多様さ、これらの組み合わせによる敬意度の微細な差を使い分ける『弘安礼節』のような態度は、本書には、見られない。試みに、発信者・受信者の官職を手掛りにして、①④⑩状の書留語・結語の使用法を、『弘安礼節』の場合に比較してみると、一致することが少ない。しかし、この簡略な表現が、本書が撰述された時点での現実であったと考えられる。

因みに、『弘安礼節』における敬意の軽重で言えば、七種の書留表現の内、敬意の高さは、「……之状如件」が七位、「……状如件」が六位、「言上如件」が二位である。「注進如件」はない。結語では、八種の内、「謹言」が八位、「恐々謹言」が六位、「誠恐謹言」が四位である。「不具謹言」はない。以上には、書状の形式面を中心に考察した第Ⅰ部の特徴をあげた。

次に、書状内容の検討に入る。

第Ⅰ部所収状に共通してみられる特徴の一は、どの往状も、何か恒例の行事といったものに関わって発信されているということである。そのため、日付は、おのずから特定されることになる。この点、第Ⅱ部所収状とは性格を異にしている。

まず、往復二通を一組として、そこで話題となっている行事を挙げてみよう。次表のA欄がそれである。

組	番号	A、行事等	B、公務か	C、篇目と順序
一	①②	元日の拝礼	○	儀制令 十八
二	③④	叙位儀	○	選叙令 十二
三	⑤⑥	女王祿	○	職員令 二
四	⑦⑧	御齋会	△ 存疑	雑令 三十
五	⑨⑩	御薪	○	雑令 三十
六	⑪⑫	天神地祇諸社祭	◎	神祇令 六

必らずしも、ここに主要な年中行事が選ばれている、というのではない。片寄っているだけでなく、行事とも恒例とも言えない西郷橋修造(十二)のようなものも混っている。これは、一応は、時を限定する言葉を含んでいるので、他に適当な六月相当状がなかったために選ばれたかと思われる。

九、十の「節分違え」についても、本文には「節分」の語がなく、決め手を欠いている。「節分」と解したのは、「四月三日、四日」という日付による。

このように、やや問題の残るものも含まれているにせよ、第Ⅰ部が、選ばれて成つたものであることは認められよう。『令^二』によつて問題が処理される話題を扱う」という制約がある以上、典型的な十二月往來的題材だけでなく第Ⅰ部を構成するのは困難であつたと考えられる。編述者は、この大きな制約の中で、季節感のあるもの、年中行事等に関わるものを選び、月順に排列して、第Ⅰ部を作成したのであらう。

第Ⅰ部所収状の特徴の二は、私信が少なく、職務に係する疑問や質問とその解答が大部分であるということである。

往状の多くは、*“判断を仰ぐ”* 体のものである。単に、不審のある用語の

三	九	六	七	六	五	四	三	二	十	九	八	七	
39 40	37 38	35 36	33 34	31 32	29 30	27 28	25 26	23 24	21 22	19 20	17 18	15 16	13 14
京官除目	大嘗会 卜食	大嘗会	大嘗会 御禊	九月尽詩会	重陽の節	待賢門院国忌	七夕詩会	西郷橋修造	最勝講	(同右)	節分違え	一切經会	祈念穀奉幣
◎	○	○	○	×	○	◎	△	◎	○	×	×	◎	◎
						存疑							
選叙令	神祇令	神祇令	宮衛令	倉庫令	雜令	營繕令	僧尼令	營繕令	僧尼令	僧尼令	僧尼令	儀制令	喪葬令
十二	六	六	十六	二十二	三十	二十	七	二十	七	七	七	十八	二十六

解説を求めたものや、依頼や勧誘の手紙が結果的に受信者の判断を促すことになったものもあるが、原則的には質問状である。その質問が、職務上の必要によるものかどうかの判別を、前掲一覧表のB欄に示した。◎は職務上のものであることを示す叙述のあるもの、○印は職務だろうと推測できるものである。全体の八割が職務に関わる質問であった。質問の内容については、後掲の〔別表Ⅰ〕を参照してほしい。

なお、存疑とした二組（△印）について補足しておきたい。

⑦は、信濃国司から贈られた鷹の技量を試すために、大原野へ狩に出向くので、「相三具公武^ヲ一令^ニ光臨^ニ給乎」という依頼である。鷹が少納言個人へ贈られたのであれば私信である。『源氏物語』（藤裏葉）では、藏人所で鷹を飼っているので、本状の少納言（差出人）、権少将（名宛人）が藏人であり、公武は鷹匠であるという可能性を考え、暫らく、存疑とした。

②⑤は、事故のため、七夕の詩会に参会できなくなつたので、作品だけ届けるとの断り状である。この詩会は、かなり正式な催しであるらしいが、公的なものかどうか不明である。公けの会であれば、作品の提出も、それに添えられた本状も職務の範囲内である。受信者は、「御作謹拝畢」と言っており、詩会の世話役と思われる。ところが、返状②⑥は、事故を起こした三品阿闍梨を処断する言葉で費されており、「僧之所行不_レ可_レ謂_二善惡_一、無_レ由云々、謹解」と結ばれている。事故の非が全面的に三品阿闍梨にあることを上申するのが、この返状の主旨であるとすれば、往状は、単に詩会への不参を断るものではなく、阿闍梨の所行の不当性を訴え、判断を求めたことになる。この場合は公文書に類するものと考えてよからう。

第Ⅰ部所収状の特徴の三は、返状は全て、『令義解』を根拠として引用する形で書かれていること、引用された「篇目（令目）」は、第Ⅰ部の構成と何ら関わりがないこと、である。引用された『令義解』の「篇目」と、『令』における順序（篇目順）とを、前掲一覧表のC欄に示した。引かれた「篇目」は全部で十であり、必要に応じて、順序や回数にこだわらず、使われている。この、「引用された篇目は構成と何ら関わりがない」点が、第Ⅱ部と大きく違うところである。

さて、返状は、往状の質問に対する解答であり、返状の発信者が、例外なく、根拠になる『令義解』の該当箇所を、直接引用していることは、前

述したとおりである。

次には、その引用の仕方をみておきたい。本書の返状における引用部分を、『令義解』と比較した結果、以下のようなことが判明する。

- 引用に使用した本文は『令義解』であり、書陵部本に非常に近い。
- 令条本文だけの引用、また、本文および割書きの引用、あるいは、割書き部分だけの引用、という三通りがある。

○ 引用者には、本文と割書き（注解部分）とを区別する意識が認められない。判断の根拠として引く場合、同等の価値を置いているようである。また、割書きが、本書では本文同大字となつて混同されている部分も多い。ただし、割書きの本文化といった現象などは、書写・転写の過程でしばしば起るので、どの時点で生じたのかの判断がむづかしい。

○ 引用は、おおむね正確である。違いがあるとしても、わずかな脱字や意図的な省略と見られるものであつて、一字も違わない状もいくつかある。こうした状況からすれば、『令義解』を座右にして、抜き書き書写したことが窺える。

ただし、この点については、書写過程における加筆、修正の可能性をも考慮しなければならない。本書の類従本には、正和元年八月頃に、令文不審を直したという奥書があつた（前掲、『貴嶺問答』伝来経路図）。

『令』をそのまま引用し、「令にはこのように書いてある」と記すのは、『令』こそが最も信頼すべきものである」という判断があるからである。

この、信念ともいえる考えは、既に、「序」として位置付けた第一状に、「或人」の意見という形をとつて表明されていた。しかも、右に挙げたような引用に見られる特色が、第Ⅰ部だけでなく、序にも第Ⅱ部にも一貫して認められるところからすると、ここには、本書全体にわたる、編述者の強力な介入が想定されるのである。

なお、返状において、『令』の規定がどのように適用されているかについては、具体的内容に即して個別に検討する必要があると考えるが、詳細は別稿に譲る。本稿では、構成に関わる特色を優先させた。（以下、続稿）

注1 『群書類従第九輯』（消息部二、巻第一三九）所収。

2 『日本教科書大系 第一巻 古往来(一)』（昭和四十三年二月、講談社）所収。

3 『尊卑分脉 第四篇』（増補国史大系、60下）、一六一頁。

4 和田英松『本朝書籍目録考証』（昭和十一年十一月初版、昭和四十五年四月影印本）、四四二頁。

石川謙『古往来についての研究』（昭和二十四年、講談社）、七五頁。

5 ただし、「第一官位令職員令」の次に、脱落（あるいは省略）がみられる。『令義解』（増補国史大系）では、続いて「後宮職員令 東宮職員令 家令職員令」が挙がっている。

6 注2文献の「解題」、一六〇頁。

7 橘豊『書簡作法の研究』（昭和五十二年、風間書房）。

8 『山槐記三』（増補史料大成28）による。

9 『群書類従第二十七輯』（雑部二七、巻第四七二）所収。

〔別表一〕

日付 関係行事等	正月一日 元日の拝礼	正月五日 叙位儀	正月十日 女王祿	正月十三日 御齋会	正月十五日 御新	二月一日 天神地祇諸神祭
往状の用向き、質問など	① 関白家拝礼に伺候すべきか。朝廷より先に臣下の家で拝礼をしてもよいのか。	③ 明日、清書役を勤めるが、王氏の叙爵を五世無位と書いてはどうだろう。	⑤ 顕子女王卒去後は女王祿が行なわれていない。また、女房梅枝は叙爵していないのに命婦と称している。正当なことか。	⑦ 明日、大原野で鷹狩をし、帰宅後、御齋会に出席する予定。同行してほしい。	⑨ 御新とは何か。	⑪ 先日献じた天神地祇并諸社の読み方と本社等を注釈してほしい。
返状における引用部（篇目と項目番号）*	② 「元日不得拝親王以下、但親戚 <small>（親者内親也。及家令以下不在禁限。）</small> 」 （儀制令十八の9）	④ 「五世王者不在諸王限、故同諸臣着緋也。」 （選叙令十二の35）	⑥ 「二世以下四世以上謂之女王、五世者自入命婦宮人之例」 「命婦者、謂婦人帶五位以上曰内命婦也、五位以上妻曰外命婦也。」 （職員令二の3）	⑧ 「凡月六斎日公私断殺生。」 （雜令廿の5）	⑩ 「凡文武官人 <small>（謂在京官人。其親王及婦女不在此限也。）</small> 毎年正月十五日、並進御新、長七尺、以甘株為一擔、一位十擔、三位以上八擔、四位六擔、……（中略）……凡進新之日、弁官及式部兵部宮内省、共檢校貯納主殿寮」 （雜令廿の26・27）	⑫ 「天神者、伊勢、山城、鴨、住吉、出雲、国造、斎神等、類也。地祇者、大神、大和、葛木鴨、出雲、大汝神、類也。 祈年祭……（中略）……鎮魂祭者、於宮内省一祭之。」 （神祇令六の1）
文末慣用表現	① 謹言 ② 恐々謹言	③ ……之状如件 ④ 不具謹言	⑤ 言上如件 ⑥ ……之状如件	⑦ 謹言 ⑧ 謹言	⑨ 謹言 ⑩ 注進如件	⑪ ……之状如件 ⑫ 注進如件 誠恐謹言
往状の差出人 上所・名宛人	① 左大將 謹上権大納言	③ 参議 民部卿	⑤ 左中將 右大弁	⑦ 少納言 権少將	⑨ 侍從 左中弁	⑪（勘解由次官） 明法博士

* 項目番号は『律令』（岩波日本思想大系）による。

(28)(27) 酉	(26)(25) 丑	(24)(23) 丑	(22)(21) 丑	(20)(19) 丑	(18)(17) 九	(16)(15) 八	(14)(13) 七
八月廿一日 待賢門院国忌 (法金剛院御幸)	七月七日 七夕詩会	六月十日 西郷橋修造	五月廿三日 最勝講	四月四日 (同前)	四月三日 節分違え	三月四日 一切経会	二月廿三日 祈年穀奉幣
②⑦明日の御幸に渡る堀川橋は、右京職の管理か、檢非違使庁の扱いか。	②⑤三品阿闍梨の牛に懸けられて車を破損し、会合へ出席できないので、作品を届ける。その僧は女と同車していたという。	②③西郷橋が去る五月の洪水で破損した。九月以前に修造してはならないという起請文があるのか。	②①僧中に、童子の分に過ぎたぜいたくが蔓延している。年齢七十にもなる大童子がいるが、印度や中国に例があるのか。	①⑨娘は他所へ行かせ、尼公をそこへ参らせるのはいかがか。	①⑦明夜、娘の方違えのために僧房をお借りしたい。	①⑤関白に陪従した檢非違使仲頼が、大理(檢非違使別当、三位の兼任)の門前を下馬せずに通過したが、よかつたか。	①③祈年穀奉幣使に任じた豊前国司から質問を受けた。祖母の服喪期間の算定に閏月を数えないのは正しいことか。
②⑧「京内大橋及宮城門前橋者 <small>謂十二門前</small> 並木工寮修営、自余役京内人夫。 <small>謂以雜係作</small> 」 (宮繕令廿の11)	②⑥「僧尼於道路遇三位以上者隱。若無処可隱者、歛馬側立。五位以上歛馬、相揖而過。若步隱。」 (僧尼令七の19)	②④「凡津橋道路、每年起九月半、当界修理、十月便訖。其要路陷壞停水、交廐行旅者、不拘時月、量差人夫修理。」 (宮繕令廿の12)	②②「聴近親 <small>謂三等以上</small> 郷里取信心童子供侍、年至十七各還本邑。」 (僧尼令七の6)	②②「僧不得輒入尼寺、尼不得輒入僧寺。」 (僧尼令七の12)	①⑧「寺僧房停婦女、尼房停男夫、經一宿以上、其所由人十日苦役。」 (僧尼令七の11)	①⑥「在路相遇者、三位以下遇親王皆下馬、雖応下陪従不下、謂軍駕陪従、依律、三后皇太子陪従亦同」 (儀制令十八の10)	①④「凡服紀者、為君父母及夫、本主一年 <small>謂以十三月為限、不計計日也。</small> 閏月、其五月以下並皆也。」 (喪葬令廿六の17)
②⑦謹言 ②⑧恐々謹言	②⑤謹言 ②⑥謹解	②③…之状如件 ②④謹言	②①不具謹言 ②②…状如件	①⑨謹言 ②②言上如件	①⑦…之状如件 ①⑧謹言	①⑤不具謹解 ①⑥謹言	①③…之状如件 ①④…之状如件
②⑦ × ×	②⑤ × ×	②③ × ×	②① × ×	①⑨ × ×	①⑦ 檀那院已講御房 ×	①⑤ × ×	①③ 左衛門権佐 ×

(40)(39) 三	(38)(37) 四	(36 35) 五	(34)(33) 六	(32)(31) 七	(30)(29) 八
十二月四日 京官除目	十一月十三日 大嘗会ト食	十一月三日 大嘗会散斎 致斎	十月七日 大嘗会御禊	九月廿三日 九月尽詩会	九月八日 重陽の節
③⑨明日より京官除目が行なわれる。執筆役を命じられたが、二つの官に任じられている時、いずれを兼官とするか教えてほしい。	③⑦ト食について詳しいことを教えてほしい。	③⑤大嘗会は何の神を祭るのか。散斎とか致斎とかいうのは何のことか。	③③天仁大嘗会御禊の函簿図を借りたい。その函簿と称する理由を教えてほしい。	③①九月尽日会に参加し、文庫建設予定地の地形を見てほしい。	②⑨九月九日は節日か。
④①「任両官以上者、一為正。官位相当為正、若皆不相当者、以一高者為正、余皆為兼云々。」 (選叙令十二の5)	③⑧「ト者、先墨画亀、然後灼之。兆順食墨。是為ト食。」 (神祇令六の17)	③⑥「大嘗会者、天皇即位之後仲冬、惣祭天神地祇也。散斎一月、自十一月朔至晦。致斎三日、自丑至卯。其辰日以後即有散斎也。」 (神祇令六の10) 「古私記云、散斎荒忌、致斎真忌者、凡一月斎為大祀、三日斎為中祀、一日斎為小祀。」 (神祇令六の12)	③④「函簿内不得横入 <small>謂函簿者、函箱也。簿文籍也。言簿列楯、函以為部隊。横入者載陣以横入也。</small> 其監仗之官 <small>謂本衛之監仗者也。</small> 檢校者得去来。」 (宮衛令十六の13)	③②「凡倉皆於高燥処置之。側開池渠、去倉五十丈内、不得置館舍。」 (倉庫令廿二の1)	③①「正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七月七日、十一月大嘗会、皆為節日」 (雜令世の40)
④①謹言 ③⑨謹言	③⑦言上如件 ③⑧謹言	③⑤言上如件	③③謹言 ③④謹言	③①不具謹言 ③②之状如件	②⑨之状如件 ③①之状如件
③⑨	③⑦	③⑤	③③	③①	②⑨
×	×	×	×	×	×